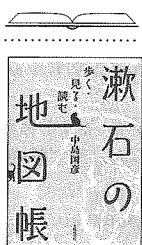


## 漱石の地図帳

歩く・見る・読む

中島国彦 著

四六判／226pp./本体2,100円



## 漱石の軌跡をたどる旅

「書を捨てよ、町へ出よう」というフレーズは詩人・劇作家である寺山修司の評論集のタイトルとして知られているが、もともとは、アンドレ・ジッドの紀行的詩文集『地の糧』に出てくる言葉である。著者の豊富な読書体験から、逆に生きる「実感」を求め、読書三昧から遠ざかろうとする心境が描かれている。そして、私が本書を一読し、感じたのは「書を持って、町へ出よう」ということであった。

その「書」とは、もちろん夏目漱石の著書である。一昨年は漱石没後100年、そして昨年は生誕150年と2年連続の記念年になったことは記憶に新しい。時代を超えて読者の心を捉え、幅広い世代に愛読され続けているという意味で国民的作家ともいえるだろう。

そんな漱石の「生涯」や「作品」を実際の「地名」に関連させながら「歩く・見る・読む」ことへ誘うのが本書である。例えば「都バスでまわる漱石一日ツアー」という章がある。都バス「上69」は新宿区の小滝橋車庫から台東区の上野公園へと続く。『こころ』の中でも、上野へ散歩に来た先生と学生の「私」が、「恋」について語り合う。そこで先生は「恋は罪悪ですよ、よござんすか。さうして神聖なものですよ」と言う。また、漱石自身も、森田草平という門下生と不忍池で身の上話を聞いていたようである。上野だけをみても、作品の中に生きる「先生」や「私」、漱石やその門下生の気配を感じることができた。これは実際に『こころ』を手に、私自身が上野を訪れ、実感したことである。まさに町を歩き、見て、本文を再読する経験を得た。読者をそこへ導く魅力が本書にはある。ちなみに「東京を遠く離れて」の章ではロンドンやスコットランドに至るまで漱石の足跡をたどっている。

このような「場所」以外にも「時代」に照明をあてた章、『坊っちゃん』を読み返す視点を明らかにした章など、この「地図帳」は「場所」や「時代」や「作品」を超えた漱石世界を描き出した良書である。

(東京都立田柄高等学校教諭 高橋伸明)

## &lt;リレー連載&gt; 私の本棚 ..... 55



東洋学園大学特任教授

北田敬子

Kazuo Ishiguro を読むために

Kazuo Ishiguro 著『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレーカスルー』*My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs* (土屋政雄訳、早川書房、2018) は2017年ノーベル文学賞受賞記念講演の記録である。英語原文も収録されている。

創作をどのようなファクターが形成してきたのか、Ishiguro は率直に語る。とりわけ興味深いのは、薄れゆく記憶の中の日本を作品にとどめたいという欲求で過去に向き合った初期作品の執筆経緯。また、無自覚なままナチスの協力者となった主人に仕えた英国人執事が、モラルも愛情も顧みなかった自分の過去と直面する物語 *The Remains of the Day* (『日の名残り』)について。この鉄面皮の執事が柔らかな感情を垣間見せる瞬間を加えたのは、しづがれ声の Tom Waits の歌に触発されたことだったと。さらには、小説作品の構成手法をブルーストから学んだばかりでなく、『特急二十世紀』という1934年に公開されたアメリカ映画をビデオで見ながら、読み手を納得させる人間関係を構築しなければ作品は成功しないと気付いたことなど。

それぞれは「小さなブレーカスルー」ながら、個人の記憶に発して国家や民族の歴史まで俯瞰する文学作品の創造へと、Ishiguro が視界を広げていくさまを本書は詳らかにする。彼が5歳の時に渡英して以来、一家は「移民」ではなく「訪問者」のスタンスでいたという点、また Ishiguro が家庭では日本語を話し日本から送られてくる漫画や雑誌も愛読しながら、地元の小学校、隣町のグラマースクールへ通ってイングランドの中産階級の少年らしい英語とマナーを身につけたことなど、常に世界文学を目指す彼の原点を再確認することができる。文学・言語いずれの興味にも応える真摯で軽やかな芸術家の肖像がここにある。

最新作 *The Buried Giant* (『忘れた巨人』) を含め Ishiguro 作品を十分に味わうために、これは小さな、しかし示唆に富む1冊と言える。若い読者に勧めるにも好適であろう。Ishiguro 自身が若い世代に期待している。